訪霊実話（怪談短編集）

千限伝　鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

訪霊実話（怪談短編集）

【Ｎコード】

Ｎ１９３９Ｑ

【作者名】

千限伝　鉄

【あらすじ】

不動産の管理会社に勤めているが、そこの住人が連絡が取れないと家族から連絡が入る。早速行って確かめてみるが、そこで見たものとは……

第一話　ドール（前書き）

いつの頃からか生と死の狭間に迷い込んでしまったようです。
何かを訴えかける死者たち。
これも何かのご縁です。
一人でも多くの方に、その叫び声をお聞き願いたく、このような形で小説とさせていただきました。
ご覧くださいませ。

第一話　ドール

資材置場が並ぶ細い道を会社の軽自動車を運転しながらゆっくりと進む。冬休みだと言うのに家で暇しているのが私だけだという理由で休みを返上してやってきた。うちの会社で管理するアパートの住人の父親から暫く連絡が取れないので、様子を見てきて欲しいとの要請を受けたのだ。当の父親は地方暮らしなので仕方が無い。正直気乗りしないが断って、社長の機嫌を損ねるよりはましだ。住人は二十代の男性。一年前までは近くの建築会社で働いていたが、精神の病を患い、今は一人アパート暮らしをしている。時おり沈んだ様子で電話を掛けて来ては取り留めない話をする。邪険にするのも可哀相なので適当にあしらいながら、相手をするのだが十分も話すと気がすむらしく自分から電話を切る。そう言えばここ一ヶ月ほど電話が無いと社長が言っていたような気がする。

アパートに着くと扉の新聞受けを少し開け匂いを嗅ぐ。ホッと胸を撫で下ろす。最悪の事態は避けられたようだ。マスターキーで扉を開け一声かけると中に入った。２ＤＫの部屋は以外と整理整頓されていて人の気配は無い。

台所を抜け洋室へ入る。奥の和室の襖は閉じられたままだ。心臓の鼓動が早くなる。ひとつ大きく深呼吸をすると一気に開いた。テーブルの上に小さな箱が置かれている。オルゴールの箱のようだ。開けてみると鍵が入っている。南京錠の鍵のようだ。

彼がこの部屋と一緒に近くのコンテナボックスを借りている事を思い出した。ここには居ないようなので一応ボックスも確認しておくことにした。

軽自動車に乗り込みすぐ近くのボックスへ向かう。思ったとおりコンテナの鍵だった。中に入り蛍光灯のスイッチを入れると、コタツや扇風機、雑誌が乱雑に置かれていて、中央に大き目の段ボール箱がぽつんと置かれていた。

突然入り口の扉が大きな音を立てて閉まり、蛍光灯が一瞬消えすぐに点いた。私はその変化を見逃さなかった。先程まで閉じていた箱の蓋が開いている。

蛍光灯が再び明滅する。点滅する明かりの中、箱の縁に白い手が掛かる。あまりの恐ろしさにその場を動く事が出来ず、ただ見つめていた。

明かりが点くたびにそれは姿を現す。頭、肩、胸、そして腹部。若い女性だった。長い髪。細く浮き出た鎖骨。丸みを帯びた乳房。くびれたウエスト。縦長の臍。うっすらと生えた恥毛。

怖いはずなのにその美しく妖しい色香を漂わせる女に心を奪われていた。俯いていた女がゆっくりと顔を上げる。再び蛍光灯が切れた。真っ暗な中、手探りで扉を開けると箱は元のまま蓋は閉じている。蓋を開けると中には、バラバラにされた精巧なシリコンドールが収められていた。他に彼の手がかりとなりそうな物は何も無い。

一週間後、田舎から父親が上京し解約の手続きをしていった。ただ、その小さく弱々しい老人の寂しそうな目が、今でも忘れられない。

第二話　枇杷

ある日誰もいない家に帰ってくるとテーブルに枇杷（びわ）が置いてある。もう少し気の利いたものが良いと思いつつ、お腹が空いていたので皮を剥いて食べた。

昔、小学校へ上がる前に住んでいた古い木造の家を思い出す。大きな門、縁側、恐ろしいものが住んでいそうな縁の下、そして臭くて暗い汲み取り便所。そのどれもが今でこそ懐かしいが、当時は怖くて仕方が無かった。その家は母方の祖母の家で、当時、長い廊下を渡った日当たりの悪い突き当りの部屋に祖母は住んでいた。

今で言う痴呆症だったのだろうか、いつも独りで何か呟き、私が行くと亡くなった祖父の話や戦時中の話を延々と聞かされたものだ。両親からは、あまり近付くなと言われていたが、お菓子をくれるのでそれ目当てに、良く顔を出した。

ある夜のこと、少し開いた縁側の雨戸から祖母が庭を眺め嬉しそうにこにこと笑っている。月明かりに照らされ白く透き通ったその顔は、とても美しく思えた。

次の日、祖母が庭にある枇杷の木の下に「おじいちゃんが埋まっている」と言い出した。お母さんにその話をするとボケているのだから相手にするな。と言われた。まあ、そんな所に人が埋まっている筈もないのだが、まだ小さかった私はどうしても気になって、小さなスコップを持ち出すと木の根元を一生懸命に掘り始める。

結構深く掘ったつもりだが実際は十数センチ程なのだろう、スコップの先に硬いものがあたった。手で穿り出してみると白い骨。私は急いでそれを祖母の元へ持っていくと、祖母はそれを大事そうに箱の中に仕舞い込み手を合わせ祈り始めた。

今考えるとその大きさからすると鳥や何か小動物のものに違いな

い。そんな所に人骨が埋まっている事などありえないのだから……
だが、その時は私もそれを信じ両親に話すことも無く、祖母と二人だけの秘密にする事にした。理由は良く分からないが、何故だか人にしゃっべてはいけないような気がしてならなかったのだ。
それから、一週間もしないうちに祖母は眠るように亡くなってしまった。顔にのせられた白い布切れと、枕元の白い箱がとても印象に残っている。結局、それに気付いたお母さんが気持ちが悪い、とすぐに棄ててしまった。何だか可哀想な気がしたが、秘密にしていた事を知られるのが嫌で気付かないふりをしたのだった。
その年の内に近くのマンションに引越し、その家も書道教室として人手に渡った。
数年後のある初夏の事だったと思う。近くを通りかかった時に枇杷の実が沢山生っていて、あまりに美味しそうなので忍び込んで2，3個食べたのを思い出す。とても甘く、美味しかった。
テーブルの上の枇杷を食べていると、あれ以上に美味しい枇杷はこれからもお目にかかれないような気がしてならない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1939q/

訪霊実話（怪談短編集）

2011年1月21日09時55分発行